

# 中学1年生の良さを伸ばす指導に向けて

中学校の3年間で生徒が大きく成長していくためには、1年生での指導でその土台をしっかり築くことが重要となる。国立音楽大の新藤久典教授、3校の学校事例を通じた編集部からの提案と、1年生の良さを伸ばす指導成功のポイントをまとめた。

## 今回の特集を通して編集部が伝えたいこと

### 「型」をつくるために 中学1年生の「良さ」を引き出す

今号の特集は、本誌がこれまでの取材で多くの先生方からうかがった「3年間の短い中学校生活で生徒を大きく成長させるためには、1年生の過ごし方が大事」という言葉に正面から向き合うテーマとした。

改めて、1年生が直面する課題に焦点を当てると、教科担当制になり、教科ごとに進め方が多様になる授業、たくさん課される宿題、先輩と体力差がある中でついていかなければならない部活動、先輩や同級生と築く新しい人間関係など、適応すべき課題がさまざまにあることが分かる。1年生がそうした一つひとつの課題を乗り越えていく過程において、学校は、教師はどのような姿勢で指導してい

けばよいか。

国立音楽大の新藤久典教授は、自身の中学校での指導経験を踏まえ、「中学1年生の良さを引き出し、伸ばす」という視点の重要性を示唆した。1年生に中学生としての「型」を身に付けさせることは重要だが、教師の思いが先走り、規律指導一辺倒になっていないか、1年生の成長や課題を上級生との比較の中で捉え過ぎてはいないかと指摘し、目の前にいる1年生の姿を見取り、自信を持たせて、自立を促す指導の大切さを説いた。

そこで挙げられた5つの指導のポイント  
は、学校事例で紹介した3校の取り組みにも具体的に反映されていたが、今回は特に2つに注目したい。

1つめは、1年生に企画・運営などを任せ、主体性を引き出す活動を意図的に取り入

れることだ。1年生は、行事や部活動では上級生の指示に、授業では教師の指導に「従う」場面が多く、自ら意見を言うなどの積極性を出しづらい。しかし、新しい生活に胸を膨らませている1年生だからこそ、学習でも行事でも主体的に取り組ませるチャンスではないだろうか。

大阪市立淡路中学校では、小学5年生を対象とした中学校の体験授業で、1年生を「リトルリーダー」というサポート役にして「先輩」としての役割を担わせ、小学生との交流活動や支援内容を自分たちで考え、運営させていた。また、日立市立多賀中学校は、学校全体の生徒会とは別に「学年生徒会」を設け、学年行事の運営や学年の自治を任せている。吉賀町立柿木中学校では、「自主学習ノート振り返りシート」で月1回、家庭学習について振り返り、自分の課題や目標を考えさせる場面を設けて、学習に自ら取り組む姿勢を育もうとしていた。

## 中学1年生の良さを伸ばす

2つめは、活動をグループで行い、集団としての力を高めることだ。3校とも、紹介した取り組みはグループ活動が基本であった。グループ活動の利点はさまざまにあるが、特に1年生にとっては、多くの場合、複数の小学校から生徒が集まって新しい友だちができ、また部活動や委員会活動を通していろいろな先輩と出会う中で、今までにない刺激や目標を得られる機会になることが挙げられる。

日立市立多賀中学校の「学年生徒会」では、前期は小学校でもリーダー格だった生徒が委員に立候補するが、後期にはその活躍を間近で見ていたサブリーダー格の生徒が立候補するようになるという。吉賀町立柿木中学校は、クラスで「自主学習ノート」を見せ合う機会を設け、友だちがどのような学習をしているのかを知ることによって、自分の学習を振り返り、学習への意識を高めようとしていた。また、大阪市立淡路中学校では、小学生の体験授業当日に向けた準備を数カ月にわたって行うが、その全てをグループで行い、学力だけでなく、仲間のさまざまな顔を見る機会をつくり、仲間づくりを促していた。

まだ中学校になじんでいない1年生だからこそ持ち得る意識、つくり出せる環境などがあるはずだ。今号の特集が、1年生の持ち味や良さを引き出す指導を考える1つのきっかけになれば幸いである。

## 中学1年生の良さを伸ばす指導成功のポイント

**「先輩」としての活動に  
継続的に取り組み、自覚を持たせる**

大阪市立淡路中学校（P.10）の「リトルティーチャー」は、単発の活動ではなく、準備活動を含め、半年間継続して行うことで、1年生に「中学生」としての自覚を持たせ、それを学習意欲の向上や生活態度の改善に結び付けていた。準備活動では、上手な話の聴き方、褒め方、相手の立場で考える大切さなど、コミュニケーションで大切な技能も学ぶ。こうした力を付けた上で、グループで小学生との交流会や支援の内容を考えることによって、仲間意識を高め、クラスの信頼関係を築いていた。この互いを認め合う関係があることが、普段の授業の「安心して学べる環境」につながっている点に注目したい。

**1年生の気持ちをくみ取った  
方法で学習へ意識を向かわせる**

吉賀町立柿木中学校（P.15）は、学力面から1年生に自信を持たせ、自ら学ぶ姿勢を育もうと、入学時から小学校段階の復習を徹底的に行っていた。「自主学習ノート」は、小規模校の利点を生かし、学年縦割りの班活動とし、教師全員体制で毎日チェックをして

いた。また、ノートの回収役を3年生にしたり、テストの不合格者には放課後補習を行って部活動に参加しにくいようにしたりと、「先輩に迷惑はかけられない」という1年生ならではの気持ちをくみ取った方法を取り入れていた。活動を見直す際には、1年生の心理をもっと考慮するとよいかもれない。

**自己有用感を高められる  
集団づくりを行う**

日立市立多賀中学校（P.20）では、3年間を3つのステップで考え、1年生を「認められる段階として、自分や友だちの良さを認められるような集団の育成に努めていた。「学年生徒会」に行事の運営を任せ、行事の成功には生徒全員の協力が重要であることを認識させ、リーダーだけでなく、生徒それぞれが活躍する場を設けていた。そうした意識と場づくりの手順が示されているので、参考にしたい。また、学年通信には、生徒が活動で感じたことを、1年かけて全員分紹介していた。そこでは、生徒に自分が果たした役割の大きさを改めて認識させ、自己有用感を持ち、学校生活への意欲を高めるといった効果が見られた。学年通信を生徒の活躍を伝える場としてもっと活用してもよいだろう。